世にためしなき事ども再興なる、よろこびに堪へず心に思ひつゞけし

五百年のむかし覺ゆる今日をこそまた行末のためしにはせめ　享保七年

圓通寺に御幸ありける時、松が崎山の躑躅の盛なるを見たまひて

尾上までたゝみあげたる岩がねに躑躅も花の咲きのぼりつゝ　享保十六年元陵御記

苗代水

せき入れて苗代小田にまづぞ見る千町におよぶ水のこゝろも　貞享三年

夜橘

みる書ののこす昔もことそへて窓ふかき夜にかをるたちばな　正德二年

早苗多

いく千町田の面にぎはふ時もきぬとる手かずそふ民の早苗に　元祿十六年

雨中早苗

霖雨は晴間をいつとたら鳥の鳥羽田のさなへ今日もとるらし　元祿十一年

晴れぬ日をふるのわさ田に立つ民や雨にも今や早苗とるらむ　同上

萩映水

水のあやにそこのかげさへおりはへて錦をたゝむ風のあき萩　延寶八年

月契千秋

千代かけてくもらじ月の秋津島やまとの國はおなじひかりに　延寶七年

月不選處

あふぎ見よわが秋津洲のほかまでもあまねくてらす月讀の影　貞享元年

浸天秋水白茫茫

靈元天皇

ゑろたへの月をぞひたす沖つ波明けわたる空の海もひとつに　元祿八年

菊　久　盛

ことくさの花はのこらぬ霜の後にあらはれけりな菊のさかえも　享保五年

修學院御幸之記

長月の廿日あまり、修學院普明院宮にまうづべきよしを仰せ定めしに、十日あまり九日の夜の夢に、後水尾院、ありし御さまにてこゝろよくうちゑ　享保六年

後水尾院は父帝

ませ給へるをまさしく見奉りしかば、さめて後、をりからの感思あさからざりし程に、つとめておもひつゞけし

夢ながらうれしと見つるたらちねのゑめる面影いつか忘れむ

同じ院の帝の八十の御賀にまゐらせし白がねの杖にむすびつけたりし歌の

元陵御記（圖書寮御本による）

一四六頁參照

御かへりごとに、「つくからに千年の坂もふみわけて君がこゆべき道ゑるべせむ」とありし。此山莊は、代々の離宮にとおぼしおきてさせ給ひたりしも、むなしからざる事にとまで思ひよそへられて

散りぬとも紅葉ふみわけさを鹿のあとつけそへむ秋の山みち

その日になりて、はつかあまり七日といふ、明くるころほひ、供奉の月卿雲客、武士の警固まで事具するよしをいへば、出でたつ。正親町を北ざまに行くほど、家ごとにあつまり來りて、物見する者いくばくといふ數はかりがたし。されど、いさゝかも身を動かし、聲などたつる者一人もなく、故院のはじめて岩倉に行幸ありし時、御製に、「わけみれば草木もさらにことやめて野山が末の道もさはらず」と詠ませ給へりしも、かくこそあり

故院は後水尾天皇

けめと思ひ出でらるゝに、河原にうちいづるより、殊に見馴れぬさまども
はるゝと見渡されたるも珍しきに、山々の麓うす霧たち渡り、ゑばしの
ほどに日いでなどして、さまゝの景趣に催されたる腰折ども、道すがら
數多あれど、させるふしもなきことどもなればもらしつ。道の半にて、と
ばかりゑぐれつれど、笠もとりあへぬほどにて晴れぬ。ゆくてに見れば、
民の家居は思ひしよりも稀々なるに、田面はいづこにもはるゝと限なく
見わたさるゝほどに

はるかなる田の面を見てもいとまなき民のゑわざの程をしぞ思ふ

などつらねもて行くに、巳の刻ばかり、林丘寺にいたりぬれば、普明院宮
やがて出でおはして、限なく喜び給ふ。年久しくして逢ひ見奉らざりし、

普明水尾天皇女光子内親王院宮は皇第八後

老いかゞまれる御様にもやと思ひつれば、さしもあらで、八十八歳などに
は見え給はぬを、めできこえさす。何くれと昔の物語どものひまに、心の
うちにつゞけし

これもまた夢かとぞおもふ白雲の八重たつ麓今日は訪ひ來て

ゑばらくありて、御堂にまゐりて、觀世音の靈像、舊院の御製など拜み奉
りて、すぐに山路を八町ばかり歩み行けば、山莊の隣雲軒にいたりぬ。む
かし寛文ふたつの年にやありけむ、舊院のこの山莊に御幸せさせ給ひて、
いざなはせ給ひしことありき。九歳の時にてあれば、今年六十年になり
ぬ。そこばくの春秋、こゝに來ざりし事、今更に思ひ出でて

この山のみるめをさへに耻づるかな六十隔てし老のすがたに

舊院は父帝

山のみるめといふことは、宇津保の物語俊蔭の巻に出でたり。山神のみるめをいへることなり。さてこの隣雲の軒ちかき紅葉、こゝろありげに染め殘りたるが、わきて千入なるを見て

今朝までもいろまされとやたぐれつる雲の隣の軒のもみぢ葉

それより赤山の權現にまゐりて、をばらく祈念し奉る。そのかみ脱屣のはじめつ方より、諸社に三年のほど月ごとの法樂すること、今は二十餘社に及びぬれど、かく社頭にむかへる處はなきを、去年の六月より此社の法樂をはじめ、月毎に怠なくて、今この寶前に向ひ奉ること、わきて淺からぬえにしにやと、悦び思ひて、ことさらに拜み奉る。一年不慮の回祿ありて、今はいさゝかなる假殿なり。拜殿、鳥居ばかりぞ殘りある

神も知れかくて見るより宮柱ふたゝび立つるをりを待つとは

やがてこの山にのぼりて、松茸の少し殘りてあるを、珍らしと尋ね求めつゝとりもて行くほどに、おもほえず嶺までよぢのぼりぬ。この山の上、ひむがしは繁れる山にて、その木の間より、比叡の山たゞ咫尺ばかりのやうに見ゆ。京にて遠く見しにはかはりて、目驚くばかりにぞある。南西のかた、野山はる〳〵と見渡されたり。山崎のわたりにやあらむ、高からぬ山の上に、白くきら〳〵としたるもの、東西に長くひきはへたり。雲にもあらず、何ならむと思へば、淀川なりけり。山の上に河を見ること、思ひもかけず珍しかりければ

をち方の山よりうへに雲よりも白きを見れば淀のかはみづ

やうやう申の刻ばかりになれば、林丘寺に歸りぬ。晩食など終るほどに、

夕日はなやかにさし來て、庭の紅葉色まさりたるをうちながめゐる折しも、

此寺の鐘、耳にさしあてたるやうに響くも、めづらかにおもしろくて

もみぢ葉は入相の鐘にいろぞ添ふこの山寺のあきのゆふぐれ

以下省略しまつる

○

長月のはじめつかたになりて、山莊に茸狩せむとて侍りしに、四日の夜の

夢に、故院をまさしく見たてまつりし。こなたへ御幸なりとて、御輿よせ

たる所へまゐりて、渡殿のほどは、御手を引き奉り、御座(おまし)にゐさせ給ひて

も、のどやかに御物語などせさせたまふと、さだかに見侍りし。さめて後

おもへば、去年この山莊へ初めて行きつる前つ方見奉りし夢の事を思ひ出

享保七年

故院は父帝

でて、かくこの山莊に遊ぶこと悅びおぼしめすにやと、かしこまりいさみ

て、九日になりて出でたつをりに、思ひつゞけし

この秋もまたたらちねを見し夢の行方うれしき今日の山ぶみ

以下省略しまつる

侍故院御影前述志

あはれとやなほみそなはすたらちねの教へし道に至り得ぬ身を

享保十年元陵御記

爐火閑談

埋火のもと聞き見てし世がたりに飽かぬまとゐの夜ぞふけにける

貞享三年

炭竈

冬さむき峰のけぶりをたのみにて炭賣るわざもあはれ世の中

同上

○

靈元天皇

明宮、此の春より大學といふ書を、うち〳〵ならひ侍りしほどに、ことし七歳なれば、書始のことをせさせむとて、日時を選み、十一月十六日になむ、大藏卿を侍讀にて、古文孝經をならはせ侍るに、此頃雪をもよほして、日毎に曇りたる空の、なごりなく今朝より晴れて、日の色うるはしく、春などのやうにのどやかなる、午の時ばかり、いさゝかの讀みたがへなく、口うつしならひとりたるを聞き居て、喜びに堪へず、かねて闕如なからむことを、天滿天神に祈願申しゝそのゑるしいちじるくありしかば、かへり申のついで、思ひつゞけ侍りし

明宮は皇子職仁親王

一八二

いにしへの書はじめせし今日よりはなほこそたのめ神の守を

風

民をおもふひじりの道ものこるらし南の風のときしある世は

世治文事興

元祿四年のころ一休かたる

巖　苔

さゞれ石のかずかぎりなき世を經てや遂に苔むす巖なるらむ

治國栽樹

元祿四年

千代のかげ根ざしも深き松を栽ゑて榮ゆる國のためしにを見む

元祿六年

嶺　榊

香具山の嶺のさかき葉いまもなほ神代かはらぬ蔭をげるらし

寶永八年

松有歡聲

靈元天皇

をさまれる時つ春かぜ松の聲もろごこころにや千代よばふらむ

竹　綠　久

末とほくみどりさかゆるくれ竹は直きをあぐる世のためしかも

筆　寫　人　心

かしこきは昔の人のこゝろをもいま目の前にみづぐきのあと

○

鳳足は、さるあやしき器にしもあらねど、故院の御硯なればとて、端溪の秀石にもかへず。こゝに宰相中將源朝臣は、武をそなへ、文を兼ねて、絶代の名士なり。よりて命じて、彼硯の銘を志るさしむ。その文、こゝろ忠義の氣をふくみ、詞金玉の聲をなせり。これにむくふるに、我何をかせむ。

元祿八年

元祿十二年

元祿六年

故院は父帝

源朝臣は德川光圀

たゞとほく此硯を傳へて、久しくこの文を殘さむといふ。其詞にいはく

つたへゆく硯の石のよはひもて世々にのこらむ言の葉ぞこれ

○

もろこしの廣南といふ所より、象をのぼせて、江戸にひかす事ありしに、めづらかなるものなれば、內にても、洞裏にても、わざとひかせて觀るに、皇子たち攝籙をはじめ、群臣おの〳〵、內、洞中にわかち參りて見るに、かれこれ歌よみ詩つくりなどす。歌には昔より詠める事なし。唐の詩にだに一二首ならでは見えずといふ。そのついでによめり。四月廿八日の事になむありける

めづらしく都にきさのからやまと過ぎし野山はいく千里なる

久堅の、天の浮橋、かけまくも、畏き神の、みことより、心を種と、まねび來て、世々に榮ふる、敷島の、わが日の本の、國の風、吹き傳へたる、道を又、いやつぎ〳〵に、のこすとて、和歌の浦浪、人なみに、名をのみかけて、おほけなく、つたなき身を、も、忘れつゝ、古へ今の、歌ごとの、深きこゝろを、いひさとし、ひめ置くことの、數々に、授けしまでの、日數をば、幾日ばかりと、數ふれば、五月の月の、はじめより、菅の根長き、日を送り、三十日のほどに、久しくも、なりにたれども、雨風も、時に順ひ、大方の、世にも萬の、さはりなく、とげし願は、嬉しけれ、これを思へば、いちじるく、神の守れる、この道を、此世に生れ、此國に、ありとある人の、仰がざらめや

正德四年宸翰集

反歌

つたへ行くたるべは神のこゝろにてすゑたのもしき敷島の道

東山天皇

寄天祝

仰ぎみる天の道をばはじめにて世はひさかたの末もかぎらず

元祿三年

禁中祝

家々のつたふる道もすゑとほくわが百たきの千代ちぎるらし

寶永六年宸翰集

寄龜祝

いまよりの秋にかぞへむ池ひろみところ得てすむ龜の齡を

元祿八年春を一本春や

春到氷解

風わたる汀のこほりうち解けていけのこゝろも春を知るらむ

立春朝

出づる日の光のどけみ岩戸あけし神代おぼゆる春も來にけり　大神宮御法樂千首

梅有喜色

草も木も春まち得たる色はあれどまづ咲く梅のこゝろをぞ思ふ　元祿二年

梅香

神垣になほ幾千世の春を經てにほひつきせぬ梅のたたかぜ　貞享五年宸翰集

花插頭

のどかなるはるの心のあかなくに散らずは櫻千代もかざさむ

野雪

降る雪のゆふべをさむみ思ひやる野守がいほや埋みはつらし　元祿六年

禁庭松久

色かへぬくもゐの庭の松が枝に今より契る千世のゆくすゑ　貞享四年宸翰集

中御門天皇

春祝言

あらたまのひかりのどけき春風に軒端の松も千代よばふなり　　宸翰集

椿葉契久

北にみる星のひかりのたま椿かげあらためむ春ぞひさしき　　元文二年宸翰集

春到管絃中

春に今をちらぶる琴のおのづからをさまれる世の聲はのどけし　　正德五年

竹裏聽鶯聲

色かへぬ竹のうてなにうぐひすの鳴く音や千代の春を告ぐらむ　　享保二年

廣南よりのぼせける象をみそなはしける時

時しあれば他國なるけだものもわ(今日)が九重にみるはうれしき(が)(き)

一八五頁參照宸翰集他國はひとのくに下句は靈元天皇の御添削なり

夜爐火

寒き夜にぬぎし御衣(みけし)のためしをも忘れて去らぬうづみ火のもと

○

教の道は、やまと唐土さま〳〵あるが中にも、丹扆箴は、常に心にかけて見るべきを思ひて、此箴の六首を書かしめむは、誰にかとて、豫樂院准后にのぞみ試みしに、書きつくされたる墨つきのにほひは、筆の海の深き底をも探り知り、此道にたへたるほど見えて、たぐひもあるまじくなむ。他の國にも、筆のことを尋ねしに、心正しければ筆正しとてたへたる古こと

豫樂院准后は近衛家熙

をも思ひ出づれば、筆のすなほなるは、心のいさめともなるべく、いさゝか志をのべ侍る

何の道もかはらずながらわきて此すぐなる筆は諫ともみむ

名だかきはやまと唐土あまたあれどこの水ぐきのあとはことなる

櫻町天皇

神祇　御百首　寛保二年

あまてらす神のさづけしかゞみこそうべわが國の光なりけれ

天てらす神ぞたるらむ末ながき代々の日嗣を祈るこゝろは

山霞　寛延二年

かすみけり天てらす日の神路山神代の春の立ちかへりつゝ

幸逢太平代　享保廿一年

五十鈴川すめるながれを傳へきて波たゝぬ世の春のうれしさ

御裳濯川

神かぜやみもすそ川の月かげにかけてすゞしき波のたらゆふ　寛保二年

秋河

かぎりなき秋をや月も契るらむみもすそ川の清きながれに　元文三年

雜

かしこくもこゝのへちかく守りますめぐみをぞ思ふ賀茂の神垣　賀茂御奉納十五首宸筆集

中將雅重朝臣宇佐使參向の時、たまはりたる

かへり來てかたるをぞ待つ旅衣うらめづらしき海のおもてを

祝

神代より天つ日嗣のいやつぎにさかゆる國は動きなくして　御百首

祝言

たるしおく聖の書のをしへにもたがはぬ御代の道のたゞしさ　寛延二年

寄天祝

大空にみちて照らせる日の本のこの國とてやうべも曇らぬ　享保十四年

寄國祝

天が下なべてやはらぐ國の風のゆたかなる世を民やたのしむ　寛保三年御著到百首

寄道祝言

磯城島やつたふる道も神代よりかけて絶えせぬあまのうき橋　寛保四年

寄竹祝

百數や神代の風をうつし植ゑてふりせぬ竹のおとのさやけさ　元文五年

迎春祝代

治まれる春をむかへて國民もなべてにぎはふ御代の長閑けさ　享保十五年宸翰集

多

百數や百のつかさのまつりごとあまたの道もなべてたゞしき　寛保元年

民部卿雅香卿拜賀の日、治民といふ香をたきはりし御包紙に　飛鳥井雅香

治まれる民のつかさのまつりごと昔のまゝにかへるをも見よ

天象

あきらけき神代のまゝに月日星くもらぬ天のみちぞたゞしき　寛保二年

述懷

かしこしな神代のまゝに皇神のめぐみつたふるあまつ日嗣は　寛延二年

國ながくをさめし神のあととめてかはらぬ代々の誠をぞ思ふ　同上

おもふにはまかせぬ世にもいかでかはなべての民の心やすめむ　元文四年

身の上はなにか思はむ朝な〳〵國やすかれといのるこゝろに　元文五年

獨述懷

まつりごと正しき道に治めおきて代々に亂れぬのりを殘さむ　寛保三年御著到百首

立春

君も臣も身をあはせたる我が國のみちに神代の春や立つらむ　寛保三年

元日

あらたまの年のはじめはよろづ代と天地四方になほ祈りつゝ

初春祝君

櫻町天皇

まつりごとくもらぬ千代の春は來ぬ星のくらゐも君を輔けて　延享五年

早春朝

うらゝかにほふ朝日は來る春のひかりを四方に敷く霞かも

陽春布德

たのしめる民のこゝろもやす國の世は花鳥のはるの長閑けさ　寛延二年

心靜酌春酒

天が下たのしむ民のこゝろをもまづ酌みて知る春のさかづき　寛保二年

雪消山色靜

天地のやはらぐはるに山はいま雪も解けつゝかすみたなびく　元文六年

露暖梅開

春を知る梅を見るにもなべて世に惠のつゆのかゝれとぞ思ふ　元文四年

禁中翫花

すめらぎの世々のかざしに匂へなほすゑ久方の雲の上の花　延享四年

花添春色

もろこしは知らず日本の國の中の春の色香は花にぞありける　寛延三年

早苗

植ゑわたす田の面の早苗すゑとほみ鳥羽山松の色につゞきて　御百首

愛麥

おもふぞよめぐみの露の民草をわれなでし子の花のうへにも　寛保元年

山夕立

櫻町天皇

夕立の晴るゝ雲間に虹見えて日かげうつろふをちのやまの端　寛保三年御著到百首

初秋

露のめぐみ深き千五百の秋は來ぬうるふ瑞穗の國ゆたかにて　寛延二年

月契千秋

四の海なみたゝぬ世を千々の秋ちぎりてすめる池のつきかげ　寛保三年

野行幸

せり川や千代の古道ふるき世の行幸のあとも今たづね見む　寛保元年

冬夜

寒き夜をやすくぬる身ぞおろかなるぬぎし衣のためし思へば

曉天鷄

おどろかすとりの初音に起き馴れて夜深く急ぐ朝まつりごと　元文四年

浦舟

いく千里ゆきかふ浦の舟路にも波たづかなる世をや知るらむ　同上

竹有佳色

色かへぬ竹のよろづ代かくて見よなほきに民の靡くすがたを　寛保三年

名所市

惜しめたゞあだに月日はたつの市にうるわざなくて過ぐる齡を　五句一本題は

樵夫

あはれなりさも苦しげにはる〳〵と薪おひつれかへる山びと　寛保元年

曾祖法皇御影前言志

櫻町天皇

ことわりの齡わすれて今も世にいまさばとのみたのぶ君かな

二〇二

寛延元年靈元天皇御十七周忌宸筆集

忘れずよいはけなかりし身にもなほあまる恵のありし昔を

いやつぎにあふげかしこくうつしおきてのこす恵の書の卷々

思ふぞよおよばぬ代々の跡とめて塵に繼ぎぬる言の葉のみち

追慕儀同三司一回忌和歌

儀同三司は武者小路實陰

敷島の道にはおやとたのみこし臣のいさめはいまもわすれず

元文四年

桃園天皇

奉皇大神宮十五首和歌

十五首中六首を抄しまつる。和歌の次に御識を記させ給へり

春

神路山かみ代かはらで立つ春のめぐみを四方にたく霞かも

花鳥のあかぬ色音にさそはれて野邊にぞくらす春の此頃

寶暦七年宸翰集

夏

あつき日もとけぬ氷室のみつぎ物ゆたけき年の例(ためし)とぞ見る

秋

いすゞ川きよき流にあきの夜は月もくもらぬ影をうつして

かしこしな下つ岩根にうごきなき宮居さだむる神のめぐみは
あめつちとともにつきせぬ日嗣をばつたへむ末も神のまに〳〵

神祇

もろ臣の朕をあふぐも天てらす皇御神のひかりとぞおもふ　寶暦七年

祝

神代より世々にかはらで君と臣の道すなほなる國はわが國　寶暦八年

曉述懷

夢さめてなほもかしこき道々を思ひつゞくるあかつきのそら　寶暦六年

田家

にぎはふと聞くぞうれしき小山田の四方にかずそふ民の家々　寶暦十一年御著到百首

立春

天の戸のあくる光ものどかにて神代かはらぬはるは來にけり　寶暦七年

風光處々生

あさ日影霞にほふ山の端も麓の野邊もかぜぞ春なる　寶暦十年宸筆集

早苗

時きぬと田の面の早苗とり〳〵におりたつ民の聲もにぎはふ　寶暦元年

賤の女がすゑはる〳〵とうゑわたす小田のさなへの綠すゞしき　寶暦十一年宸翰集

草花色々

咲き出づる秋を待ち得てませの内にめづる千種の花のいろ〳〵　寶暦十二年同上

菊契千年

九重に咲きそふにはの秋の菊はなにちぎりて千代も經ぬべし　寛延二年

砌竹

いく千年いろもかはらず九重のみぎりの竹のかげさかえ行く　同上

後櫻町天皇

神祇

あふぐぞよこの日の本の道すぐに代々まもります伊勢の神垣　明和四年

まもれなほ伊勢の内外の宮ばしら天つ日嗣のするゑながき世を　明和五年

朝

朝な〳〵心のかゞみみがきそへて祈るまことは神やたるらむ　享和二年

嶺松

三笠山さしもかしこき神代よりいまもさかゆる峰のまつが枝　明和七年

寄民祝國

後櫻町天皇

民やすきこの日の本の國の風なほたゞしかれ御代のはつ春　安永十年

立春風

やはらぐる春たつ今日に吹く風は民の草葉にまづおよぶらし　明和七年

霞遠山衣

ほのかなる遠山まゆのにほひより霞のころも四方にたつらし　文化二年

水郷春曙

水無瀬川その山もとの霞にもたのぶむかしのはるのあけぼの　天明七年後鳥羽天皇五百五十回忌御法樂

初花

めづらしと今朝みそめぬる花櫻なほ咲きそはむ色香をぞ待つ　明和四年聖廟御法樂

花色春深

春ふかき色をこゝろのはなざくらたをる手向を神もみそなへ　明和九年

松色春久

いく春もなほ色そへよすべらぎの世々のさかえを契る松が枝　寶暦十四年

籬瞿麥

唐錦まがきに敷くと咲きあまる露もいろ〳〵のなでしこの花　寛政三年

十三夜月

日の本の秋のひかりをみがくらむ代々にその名も長月のそら　享和四年

山月明

雲霧を吹きはらふ風にみがかれてなほ照りまさる山の端の月　安永三年水無瀬宮御法樂

水郷月

後櫻町天皇

名にたかき最中の月のかつら川てりそふ影は世々にくもらじ　文化三年

擣衣

里つゞき心かはして賤の女が夜さむのころもうちたきるこゑ　安永六年

秋田

豐年と民やうれしき幾千町ほなみをわたる小田のあきかぜ　寛政十年聖廟御法樂

網代

もる人の袖さむからしあじろ木に寄する木葉もこほる河かぜ　文化十年宸翰集

冬夜長

幾度か夢さめて思ふ寒き夜をいをねかぬらむたづがふしどを　文化元年

關路行客

四方の國をさまれる世にあふさかの關路やすくもかよふ旅人　明和六年

窓燈

てらせなほ五つの道にたがはじと思ふこゝろの窓のともし火　享和元年聖廟御法樂

園竹

すぐなるをこゝろの友と栽ゑそへてあけくれあかぬ園の吳竹　文化三年

かきなす琴の

松風も世のゆたけさを調ぶるやかきなす琴の音にあはせつゝ　寛政元年

後桃園天皇

迎春祝代

のどかなる春を迎へてさま〴〵の道榮えゆく御代ぞにぎはふ　明和七年

鶯有歡聲

九重のみぎりの松にうつり來て千年をちぎるうぐひすのこゑ　明和六年宸翰集

櫻

のどかなるわが九重のさくら花盛ひさしく見るぞうれしき　宸翰集

禁庭菊

あかず見る雲居のにはに幾秋もさかりひさしくにほふきら菊

白菊戴露

おく露のひかりもそひて今日ごとにめづるまがきの白菊の花　安永六年重陽和歌御會宸翰集

光格天皇

神祇

天つ神くにつやしろの惠もてとよあしはらの風ぞ正しき　文化十三年

寄月神祇

八幡山月もひかりをみがくらし今日のこよひの神の行幸に　寛政九年

春日山雪

春日やま神の齋垣(いがき)のあさかぜにそらよりかくる雪のたらゆふ

寄國祝言

よろづ民やすくたのしむ時つ風とよあし原の國さかえつゝ　寛政九年

寄道祝言

たきしまの道は神代の道なればいにしへ今にいや榮えつゝ　同上

迎春祝言

天地も人のこゝろもやすくにやはらげるはるは來にけり　天保二年

天明七未年春の末より、世上米價貴く、京町人飢人多く、人々難儀して、御救護願ふ心にや、老若數百人、禁裏の外郭の圍を巡り、歩行人四五日が程なりければ、聞召されて

みのかひは何いのるべき朝な夕な民やすかれと思ふばかりを　世評書留

民草につゆのなさけをかけよかし世をもまもりの國のつかさは

春天象

光格天皇

天の原やはらぐひかり世にみちてやぶしわかぬや日の本の春　文政九年

早春

さかえ行くこの初春のよろこびに神のめぐみを猶あふぎつゝ　寛政十二年石清水社御法樂

初春

なべて世のひとの心も春に今朝あらたまりつゝのどかなる空　寛政三年聖廟御法樂

喜氣契多春

蒼生(たみ)をおほふたもとにあまる嬉しさは國やすきてふ春や幾春　寛政十二年

春來望海上

春のくる光うらゝにわたつ海の沖つゑほあひも霞みあひつゝ　天保四年

池水浪靜

さゞら波かすみをよする春の色に池の心の長閑けさも見ゆ　文政四年

朝霞

末とほき千年の春のいろ見えてゆたかにたてる朝がすみかな

九月十三夜

照りまされ日の本にのみ名を得たる今宵くもらぬ長月のかげ　寛政七年

秋風

吹くからに聲もひかりもたゝろたへの月にすみ行く秋かぜの空

菊露

秋ふかみ老いせぬ菊の花の上におきそふ露は千代のかずかも　寛政三年

旅

光格天皇

四方の國をさまる君が御代なれや野山のたびも道ひろくして　文政二年

天晴有鶴聲

聲たかみふりさけ見れば天の原日影うらゝに鶴ぞ舞ふなる　同上

庭上鶴

住み馴れていくよろづ代をちぎるらむ我が九重のにはの友鶴　寛政七年

離竹

朝夕にこゝろを習ふ友なれやまがきの竹のすなほなるかげ　天明六年

仁孝天皇

神祇

天照らす神のめぐみに幾代々もわがあしはらの國は動かじ　文政八年

寄松祝

萬代もかぎりはあらじことの葉のさかえ久しき和歌の浦松　文化十四年　宸翰集

秋祝

民の戸のとしある秋の穂に出でて千町の稲葉なびくゆたけさ　文政十一年

歳暮祝

この冬は雪もたゞ〳〵降りつみてげに豐年のたるきくれかな　弘化二年　宸翰集

立春天

岩戸あけし神代おぼえて天つ空日かげうらゝに春は來にけり　文政四年

鶯

あらたまの年のはじめに告げそめて千代のはる知る鶯のこゑ　文政三年

春竹添色

千尋あるかげもひとしほ色そひてげに春ゑるき庭のくれたけ　文政八年

霞始聳

あらたまの年の光をまづ見せて空ものどかに立つかすみかな　文政十一年

桃花

ひさかたの空もひとつにくれなゐの色にうつろふ桃のはな園　文化十五年

待花

ちはやぶる北野のもりの櫻ばな神もこゝろに咲くを待つらむ　文政五年

舟中翫月

いく千里いく重の波も漕ぎゆかむ船路を月の照らすかぎりは　天保十五年

菊有延年色

さゞれ石のいはほとならむ秋幾世猶つきせめや菊のさかりは　文政十三年

和琴

たぐひなきあづまの琴のをらべこそ神代の風を吹き傳へけれ　文政八年

蹴鞠

雪かゝるかゝりのかげにいさみつゝ寒げにもなき庭鞠のこゑ　弘化二年

孝明天皇

立春　元治元年

はるの立つかしこ所の鈴の音に神代たられて仰ぐそらかな

社頭雪　嘉永六年

國民のやすきをいのる神垣にかけてぞなびく雪のたらゆふ

宇佐宮御奉納五十首の中に　六首を抄しまつる

遲日　元治元年

萬こと怠らずせむ春の日のめぐり遲きをあだにくらさで

更衣　元治元年　宸翰集

あしき事はかくあらたまれ夏來ぬと花に染めしもかふる衣手

梅雨

長くともかぎりはありぬ梅の雨さりとて晴れよ異國のうさ

擣衣

音にたてゝ百度千度うてや〳〵夜寒を業のたづがさごろも

述懷

天がたた人といふ人こゝろあはせよろづの事に思ふどちなれ

神祇

奉るそのみてぐらを受けまして國民やすくなほ守りてよ

寄世祝

天地とともに久しく世のなかのするゑがするゑまで安けくもあれ　安政四年

○

あさゆふに民やすかれとおもふ身のこゝろにかゝる異國の船　安政元年孝明天皇紀

春人事

この春は花うぐひすもすてにけり我がなすわざぞ國民のこと　文久三年

述懷

神ならばわが心をもたろしめしひたすら願ふことをうけませ　文久二年

さま〳〵に泣きみ笑ひみ語りあふも國を思ひつ民おもふため　元治元年

寄風述懷

こと人とともゝ〳〵はらへ神風や正しからずとわが忌むものを　文久二年春日社御法樂

こと國もなづめる人ものこりなくはらひつくさむ神風もがな　安政六年

寄弓述懷

あづさ弓ま弓つき弓としをへず治まれる世にひきかへさなむ　文久三年

寄弓祝言

弓とりてひくもひかぬも武士は治まる世々のためならぬかや　安政四年

述懷依人

深き淵うすき氷のいましめに日々に我が身をかへりみつゝも　安政二年

冬夜

うば玉の夜すがら冬のさむきにもつれておもふは國民のこと　嘉永七年

書

孝明天皇

日々日々の書につけても國民の安き文字こそ見まくほしけれ

文久三年

皇居炎上御避難御時、鴨社にて

國民のやすけきことを今日こゝにむかひて祈る神の御前に

安政元年宸翰集四首を抄しまつる

異船のをさまることをさらにいまふかくも頼む鴨の御社

聖護院宮に移りかはる道に、野菜物を見て

いつとなく心づくしに作りなす民のなりはひ思ひこそやれ

聖護院宮にて、同じ火にあひし人々の事を思ひやりつゝ

我よりも民のまづしきともがらに惠ありたくおもふのみかは

正月島津齊彬にたまへる寄國祝

武士もこゝろあはして秋津洲のくにには動かずともにをさめむ

日々あなたこなたよりものさゝげまつりける時五句のみかは御草卒の際の御詞づかひかと思ひまつれど叡慮の測さに揭げ奉る

安政二年

毛利慶親にたまへる

國の風吹きおこしても天つ日をもとの光にかへすをぞ待つ

文久元年孝明天皇紀

文久はじめの年季冬、物部の忠魂、磐石をもつらぬく利劍送りこせること、時世にあたり、實に憂患をはらふ志と頼もしく思ひつゝよめる和歌

世を思ふ心の太刀と知られけりさやくもりなきものゝふの魂（たま）

文久元年島津義久同久光に賜へる

たやすからざる世に、武士の忠誠のこゝろを喜びてよめる

やはらぐもたけき心もあひおひの松の落葉のあらずさかえむ

文久三年松平容保に賜へる

ものゝふと心あはして巖をもつらぬきてまし世々のおもひで

弘前侍從より、名だかき正宗の刀、みづとにつくりなしおこせけるに

いく世々もめでなぐさまむ名もたかき玉の刀に玉のつくりは

弘前侍從は津軽承昭

元治元年

仙臺の中將よりくらおきの馬おこせけるに　仙臺の中將は伊達政宗

みちのくの國の司の心あればみつぐもみづのいさぎよき駒　元治元年

砧

うたでやむ物ならなくに唐衣いくよをあだになほおくりつゝ　文久二年孝明天皇紀

初春

百のつかさ民の家居も春に明けていとなむ業ぞのどかなりける　嘉永四年五句一本のどけかりける

春來日暖

この國は日の本なれば日かげより花うぐひすの春ぞ見えゆく　嘉永五年

禁中祝

九重のうてなの竹のみどりにも千代の春たついろぞ見えける　嘉永二年

霞映日

ちはやぶる神代の春のたちかへり日影うらゝにかすむ空かも　慶應二年

近衞の亭に行きむかひ、名にしおふ糸櫻を見て　近衞の亭は近衞忠熙の第

見れどあかぬ風をすがたのいとざくら花の色香は長々し日も　安政一年孝明天皇紀五首を抄しる

青柳の千すぢの糸に香をこめて咲くかとおもふ花のいくもと

いと櫻いとながき日もくり返し風のまに〳〵なびく花ぶさ

夕景になりて、景色またたぐひなければ

花のうへに夕日の影のうつろひてさらに色ます庭の面かな

庭へ下り立ち、木の本に打つどひて

何ごともおもひ忘れて月のかげ花の色香をさらにめでつゝ

糸櫻

いとざくらいとくりかへし世を思ふ心の花はうつろひもせで　文久二年

霧隔行舟

異國の船も見わかずへだつるは神のこゝろの霧の海原　安政二年内侍所御法樂

白露

奢るとはつゆも思はぬ我が庭に誰が白銀のたまをまきしぞ　文久元年

雲間寒月

雪になるか霙になると見し雲のひまほのめかしさゆる月かな　宸翰集

浦千鳥

浦づたふ千鳥につれて世々のためまこと正しき人を得まほし　文久二年春日社御法樂

水鳥多

むらがりて何を語るぞわがおもひ等しくおもへ池の水鳥　文久三年石清水社御法樂

竹雪深

國のこと深く思へといましめの雪のつもるか園のくれ竹　文久三年内侍所御法樂

冬日

あるはたぐれあるは雪げにくもりても本の光はいつも變らじ　安政六年

煙

朝な夕な民のかまどのにぎはひをなびく煙におもひこそやれ　嘉永六年

明治天皇

神祇

やすからむ世をこそいのれ天つ神くにつ社に幣をたむけて　明治三十五年

ちはやぶる神のまもりによりてこそわが葦原の國はやすけれ　同　上

わがこゝろおよばぬ國のはてまでもよるひる神は守りますらむ　同三十六年

目に見えぬ神にむかひてはぢざるは人の心のまことなりけり　同四十年

めにみえぬかみのこゝろに通ふこそ人の心のまことなりけれ　同　上

わが國は神のすゑなり神祭る昔のてぶり忘るなよゆめ　同四十三年

社頭

はるかにもあふがぬ日なしわが國のたづめとたてる伊勢の神垣　同三十六年

社頭祈世

とこしへに民やすかれといのるなるわが世をまもれ伊勢の大神　同二十四年

新年

神風の伊勢の宮居の事をまづ今年も物のはじめにぞきく　同三十七年

水石契久

さゞれ石の巖とならむ末までも五十鈴の川の水はにごらじ　同二十二年

國

人もわれも道を守りてかはらずばこの敷島の國はうごかじ　同十一年以前

おごそかに保たざらめや神代よりうけつぎ來たる浦安の國　同四十三年

寄國祝

あらたまのとしを迎へて萬民ひとつこゝろに國いはふらし　明治二十三年

橿原の宮のおきてにもとづきてわが日本の國をたもたむ　同三十七年

民

すゝむ世を見るにつけても思ふかなわが國民のうへはいかにと　同四十年

千萬の民の力をあつめてぞ國はゆたかになすべかりける　同四十四年

冬夜寒

たたさゆる冬の夜どこにねざめして衾かさねぬ人をこそ思へ　同十九年

祝

世を治め人をめぐまば天地のともに久しくあるべかりけり　御集附載

右、明治二年八月三日、右大臣三條實美を以て、英國皇子に贈りたまへる

祝言

なりはひを樂しむ民のよろこびはやがてもおのがよろこびにして　明治四十二年

秋祝

すめ神にはつほさゝげて國たみと共に年ある秋を祝はむ　同三十七年

寄菊祝

わたつみのほかまでにほへ國の風ふきそふ秋のたらぎくの花　同二十九年

寄道祝

葦原のみづほの國の萬代もみだれぬ道は神ぞひらきし　同四十一年

夢

明治天皇

たらちねの親のみまへにありと見し夢のをしくも覺めにけるかな　明治四十三年

述懷

いにしへの書見るたびに思ふかなおのがをさむる國はいかにと　同十一年以前

ちはやぶる神ぞたるらむ民のため世をやすかれと祈る心は　同二十四年

曉のねざめたづかに思ふかなわがまつりごといかゞあらむと　同三十五年

ちはやぶる神のかためしわが國を民と共にも守らざらめや　同三十六年

かみつよの聖の御代のあととめてわが葦原の國はをさめむ　同三十七年

まつりごとたゞしき國といはれなむ百のつかさよちから盡して　同上

事しあらば火にも水にもいりなむと思ふがやがてやまとだましひ　同四十年

千萬の民の力をあつめなばいかなる業も成らむとぞ思ふ　同四十一年

道

ちはやぶる神のひらきし道をまたひらくは人の力なりけり　同三十六年

教育

わがたれる野にも山にもたげらせよ神ながらなる道をしへぐさ　同四十三年

歌

ことのはのまことの道を月花のもてあそびとは思はざらなむ　同四十年

樂

千萬の民とともにもたのしむにます樂はあらじとぞおもふ　同四十三年

仁

いつくしみあまねかりせば唐土の野にふす虎もなつかざらめや　同四十二年

旅順の戰のさまをきゝて

世にたかくひゞきけるかな松樹山せめおとしつるかちどきの聲　明治二十八年

軍旗

ますらをに旗をさづけていのるかな日の本の名をかゞやかすべく　同三十七年（以下三十首）

鏡

國といふ國のかゞみとなるばかり磨けますらをやまとだましひ

劍

あらはさむ時は來にけりますらをがとぎし劍の清き光を

をりにふれて

暑しともいはれざりけりにえかへる水田にたてるたづを思へば

千萬のあたをおそれぬますらをもこの暑さには堪へずやあるらむ

いくさ人いかなる野邊にあかすらむ蚊の聲たげくなれる夜頃を

いたでおふ人のみとりに心せよにはかに風のさむくなりぬる

たぐれして寒き朝かな軍人すゝむ山路は雪やふるらむ

山路

いはがねのこゞしき山を照る日にもたゆまずこゆるわが軍人

軍艦

荒波をけたてゝはしる軍ぶねいかなる仇かくだかざるべき

述懷

國をおもふ道にふたつはなかりけり軍の場にたつもたゝぬも

心

たきしまのやまと心のをゝしさは事ある時ぞあらはれにける

山をぬく人のちからも敷島のやまと心ぞもとゐなるべき

田家翁

子らは皆軍のにはに出ではてゝ翁やひとり山田もるらむ

親

國の爲たふれし人を惜しむにも思ふはおやのこゝろなりけり

寫眞

末とほくかゝげさせてむ國のため命をすてし人のすがたは

正述心緒

四方の海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ

海

仇波のたづまりはてゝ四方の海のどかにならむ世を祈るかな

仁

國のためあたなす仇はくだくともいつくしむべき事な忘れそ

折にふれて

思ふこと貫かむ世をまつほどの月日は長きものにぞありける

うつせみの世のためすゝむ軍には神も力をそへざらめやは

いかならむ事にあひてもたわまぬはわが敷島のやまとだましひ

夢さめてまづこそ思へ軍人むかひしかたのたよりいかにと

明治天皇

石だたみかたきとりでも軍人みをすてゝこそうち碎きけれ
年へなば國のちからとなりぬべき人をおほくも失ひにけり
國のため心も身をもくだきつる人のいさををたづねもらすな
あらたまる事の始にあひましゝみおやの御代を思ひやるかな
いそのかみ古きためしをたづねつゝ新しき世のこともさだめむ
さわがしき風につけても外國にいでて世渡る民をこそおもへ
ことゝはぬ世にはあれども國民を教ふる道に心たゆむな
をゝしくも連りきつるあた船をうち碎きけりわがいくさびと

明治三十八年（以下六首）

船

いそしみてます〳〵船はつくらなむ海をめぐらす國のかために

蘆間舟

とる棹のこゝろ長くもこぎよせむ蘆間の小舟さはりありとも

軍馬

たゝかひの場にすゝみて乘る人と共にたふれし駒はいくらぞ

述懷

末つひにならざらめやは國のため民のためにとわが思ふこと

寄夏草述懷

國のため民の爲には夏草のことゝはげくともつとめざらめや

述懷

戰のかちにほこりてむらぎもの心ゆるぶなわがいくさびと

明治天皇

同四十二年

櫻

花ぐはし櫻もあれどこのやどの代々のこゝろをわれはとひけり　御集附載

右、明治八年四月四日、從四位德川昭武の邸に行幸ありて、五月五日に下し賜へる

霞中花

春がすみ立ちなかくしそ九重の內外へだてぬ花のさかりを　明治二十九年

花

ありとある人をつどへて春ごとに花のうたげをひらきてしがな　同四十五年

見花

高殿の窓てふまどをあけさせて四方の櫻のさかりをぞ見る　同　上

庭瞿麥

からやまと色をまじへて咲きにけりひろきそのふの撫子の花　同三十二年

夏山水

年々におもひやれども山水を汲みて遊ばむ夏なかりけり　同三十七年

海上月

ひさかたの空にありながらわたつみの底まで照らす秋の夜の月　同十七年

あしひきの山の端いづる月かげに大海原の波を見るかな　同二十年

月前遠情

晴れわたる空にむかひて思ふかな新高山の月はいかにと　同三十四年

秋雨

あやにくに秋のながめの晴れぬかなをしねかりほす頃ぞと思ふに　同三十六年

明治天皇

冬泉

冬ふかき池のなかにもほとばしる水ひとすぢは氷らざりけり　明治十八年

天

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな　同三十七年

日

さしのぼる朝日のごとくさわやかにもたまほしきは心なりけり　同四十二年

朝望山

ひむがしの海より出でて富士のねの雪にてりそふ朝日かげかな　同三十年

夕

司人まかでし後のゆふまぐれこゝろをづかに書を見るかな　同四十年

富士山

萬代の國のをづめと大空にあふぐは富士のたかねなりけり　同四十一年

鑛山

ひらかずばいかで光のあらはれむこがね花さく山はありとも　同四十年

水

器にはをたがひながら岩が根もとほすは水の力なりけり　同三十六年

島

をまといふ島のはてまで司人めぐみの波をかけなもらしそ　同三十八年

遠情

樺太にうつりし民も年を經て今は住みうく思はざるらむ　同四十二年

田

にひばりの田づら多くも見ゆるかないそしむ民の力たられて　明治三十六年

田家煙

縣守こゝろにかけよたづが屋のかまどの烟たつやたゝずや　同三十八年

植物苑

我園にたげりあひけり外國の草木の苗もおほしたつれば　同三十七年

草

いぶせしと思ふなかにもえらびなば藥とならむ草もあるべし　同上

書

くりかへしふみ見ざりせば天の下をさむる道もいかで知らまし　御集附載

右、墺地利國公使の請によりて、明治十年一月廿日、宮內卿德大寺實則をもて下し賜へる

讀書

外國の昔がたりも聞きてけりときあきらめし書をよませて　明治三十九年

古典

いそのかみふることぶみをひもときて聖の御代のあとを見るかな　同上

書

吳竹の世々につたへて仰ぐかな遠つ御祖のみことのりぶみ　同四十三年

弓矢

弓矢もて神のをさめしわが國にうまれしをのこ心ゆるぶな　同三十九年

明治天皇

鏡

靖國のやしろにいつくかゞみこそやまと心のひかりなりけれ　明治三十九年

寶

あしはらの國とまさむとおもふにも青人草ぞたからなりける　同三十七年

神代よりうけし寶をまもりにて治め來にけり日のもとつ國　同四十年

錦

とつ國の人に見すべきたき島のやまと錦をおりいださなむ　同四十五年

電信機

百千里道をへだてゝ言の葉をとりかはしぬるてれがらふかな　宸翰集

柱

橿原のとほつみおやの宮柱たてそめしより國はうごかず　明治四十二年

龍

わたなかに潛めるたつも大空の雲をおこさむ時はあるものを　同三十七年

日本武尊

まつろはぬ熊襲たけるのたけきをもうち平げしいさを雄々しも　同十一年以前

湊川懷古

あた波をふせぎし人はみなと川神となりてぞ世を守るらむ　同三十五年

閣龍

うなばらの深き思の年を經て國ありけりと知りさだめけむ　宸翰集

友

明治天皇

わたつみの波のよそにもへだてなく親しむ友はある世なりけり　明治三十八年

心

いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ　同四十五年

をりにふれて

新高の山よりおくにいつの日かうつしうゝべきわがをしへぐさ　同四十三年

なすことのなくて終らば世に長き齢をたもつかひやなからむ　同四十五年

大正天皇

新年河

たひらかに年波かへる五十鈴川かみのめぐみの深さをぞくむ　明治三十九年

社頭松

をとこ山みさををかへぬ若松のすゑたのもしき君が御代かな　同四十一年

社頭杉

さくすゞの五十鈴の宮に繁りあひてたてる神杉いく代へぬらむ　大正三年

寄國祝

年々にわが日の本のさかゆくもいそしむ民のあればなりけり　同五年

新年梅

あらたまの年のはじめの梅の花みるわれさへにほゝゑまれつゝ　明治三十五年

新年海

船ごとにたるしの旗手うちなびき浦にぎはしく年たちにけり　同三十六年

遠山雪

雪白き富士の高嶺の見ゆるかなかしこどころの松のこずゑに　大正六年

朝晴雪

ゆたかにも雪ぞつもれるあきつ島めぐりの海は朝なぎにして　同八年

寒月照梅花

影さゆる月にきほひて咲く梅の花のこゝろぞをゝしかりける　明治四十四年

雪中松

ふりつもるかしらの雪ぞあはれなる老木の松は人ならねども　同四十二年

雪中竹

ふりつもるまがきの竹のたゞら雪に世の寒けさを思ひこそやれ　同三十四年

巖上松

吹きさわぐあらしの山のいはね松うごかぬ千代の色ぞたづけき　同三十七年

海邊松

たゞほかぜのからきに堪へて枝ぶりの皆たくましき磯の松ばら　大正七年

松上鶴

こまつ原すゑはるかにもきこゆなり友よびかはすひな鶴の聲　明治四十五年

惟ふに和歌は吾が國風にして、人心を雅びやかに、はた雄々しくし、敎化を助くるところ尠からず。列聖の御製、人間に傳はれるもの多く拜せらるゝ中に、今、神祇を崇び給ひ、國家をおぼし、臣民をいつくしみ給ひ、人倫を述べまし、あるは皇軍をあともひ給ひ統べさせ給ひて、あるは四時の風物につきて、大御おもひをうたはせ給へるを選びまつり、この書をしも成しつるは、かくのごと、神祇を崇び給ひ、國家をおぼし、將士の上に、蒼生の上に、大御心をそゝがせ給へることを普く知らしめ、國民をして朝夕謹誦、聖德を仰慕し奉り、各その性情を陶冶せしめむ爲なり。特に、紀元二千六百年に當り、世界の形勢將に一變せむとし、東亞新秩序の確立を要する秋、本書の、日本精神作興に資すること大なるものあらむは、信じて疑はざるところなり。

曩に、明治天皇御集御編纂のことあらせらるゝや、信綱忝くも乏しきを其の一員に承り、また近くは、昭和十三年の御講書始に、おほけなくも、「御歷代の御製に拜せらるゝ御聖德」に就きて、進講の光榮に浴しつ。こゝに皇恩國恩の萬一に報じまつらまく、本書を撰し奉るとて、一意專心事に從ひ、數月を閲してその業を畢へぬ。因りて、畏みて卷末に一言を記すと云ふ。

なほ本書は、極めて愼重にものしまつれるなるが、或は意料外の謬もあらむには、謹みて訂しまつるべくなむ。

昭和十五年八月

文學博士　佐佐木信綱

題簽　紀元二千六百年奉祝會長　公爵近衛文麿

畏クモ

天皇　皇后兩陛下ノ　行幸　行啓ヲ仰ギ奉リ宮城外苑ニ於テ擧行セラレタル

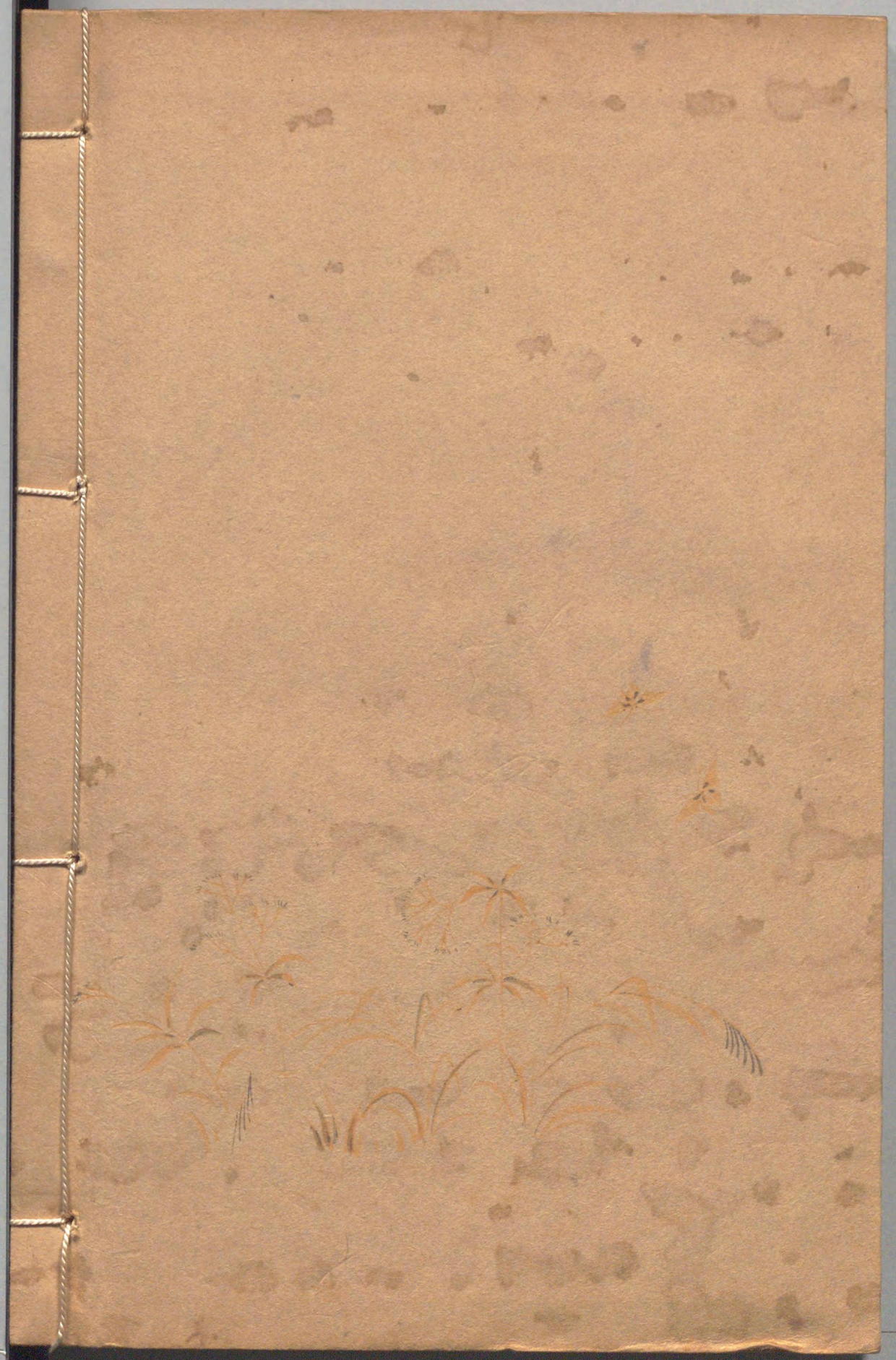
紀元二千六百年奉祝會ヲ記念シテ參列者各位ニ贈呈シソノ座右ニ備ヘ且永ク

後昆ニ傳ヘラレムコトヲ期シ茲ニ本書ヲ刊行セルモノナリ

紀元二千六百年奉祝會幹事長　歌田千勝識

紀元二千六百年昭和十五年十一月一日印刷
紀元二千六百年昭和十五年十一月十一日發行

非賣品

編者　佐々木信綱
發行者　紀元二千六百年奉祝會
印刷者　內閣印刷局

不許複製
紀元二千六百年奉祝會